

『ソフト剣道』の構想と展開

村上 徳恭（鳴門教育大学大学院）

木原 資裕（鳴門教育大学）

I. 緒言

日本における武道は殺傷の術としての起源を持ちつつ、高い倫理性や思考性を持つ運動文化へと止揚してきた歴史を持っており、対人的運動形態を通して、自己の判断力を養い、相手を尊重する教育課題を担える教材としての資質を有している。特に剣道は、「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」という理念の下、他の競技に比べ、生涯にわたり世代を超えて実践できる運動特性を持っている。しかし、近年では、その競技人口の減少化という事態が加速度的に進行している。

また、平成 20 年 3 月に新・学習指導要領の公示がなされ、その中で、平成 23 年春から中学校の体育授業で武道の男女必修化が示されたことにより、これまで学習指導要領に示されてきた「心と体を一体としてとらえる」心身一元論の考え方や、「我が国固有の文化」「伝統的な行動の仕方」「礼儀作法」等は、武道の領域で学習させることが期待されていると言えよう。ここには、単に体育科教育的な視点だけでなく、武道論的な立場から、授業（指導）内容を精選し、心と体を一体としてとらえ、技の完結性を目指す運動領域として「武道」を考える必要がある。

木原ら（2011）は武道必修化に向けて様々な取り組みが進む中で問題点として、初心者指導の難しさを挙げ、特に剣道は他の競技と比べ、防具の扱いや竹刀打突での痛みなどは非日常的なものであり、馴染みがないため、限られた授業時間の中で生徒たちに、剣道の良さや運動欲

求をともに充足させることは至難のことであるとしている。しかし、剣道の授業において、剣道の面と竹刀をスポーツチャンバラの面と剣に変更して行うことで、初心者の技能レベルの向上速度が剣道の用具のみを使用した場合と比べて速く、安全性を確保できるなど、その有効性を示唆している。

ただし、スポーツチャンバラの用具を使用しているため、剣道的な技の習得しようとした場合に、スポーツチャンバラの剣では支障をきたす場面が見られることから、竹刀に近い感覚であり、かつ安全性を確保できる用具の開発も必須であると考えられる。

以上のことから本研究では、剣道論的立場とスポーツチャンバラ的立場を併せ持つ「ソフト剣道」の開発によって初心者指導方法を確立するとともに、用具の開発を行い、体育科教材としての可能性を検討することを目的とする。

II. 研究方法

- 1) 他の武道、スポーツにおける初心者指導の成功例を文献及びインターネットにより情報収集を行う。
- 2) スポーツチャンバラの面と剣ではなく、より剣道的で操作性と安全性などに優れた用具の開発を試行する。
- 3) ソフト剣道における指導内容を精選し、最終的には剣道に繋げられるような指導方法を検討する。
- 4) 授業実践を行ない、「ソフト剣道」として確

立させるとともに、体育科教材としての可能性を検討する。

Ⅲ. 研究経過

1) クリケットの成功例

第5回剣道文化講習会においてA・ベネット(2007)は、クリケット協会の競技人口増加施策「ソフト・クリケット」を紹介した。

組織による段階的な指導システムとサポート体制を充実させるとともに、用具の安全性を高め、試合の形式やルールを調整できるようにすることで、競技人口の増加に成功した。

これを受け、剣道においても伝統と柔軟性のバランスが大切にし、遊び感覚で安全に実践ができ、剣道の正しい基本技を体得していき、興味が沸けば本格的な剣道の修行に繋がられるような「ソフト剣道」を開発し、実践するべきであると提言した。

そうすれば、競技人口減少には歯止めが掛かるとともに基礎・基本を充実させる取り組みとして、初心者指導における問題点の改善にも繋げることができる。

2) スポーツチャンバラではいけないのか。

A・ベネットが提言したのは、スポーツチャンバラではない「ソフト剣道」であった。そのため、新たな視点として剣道とよく似たスポーツとして発展しているスポーツチャンバラに焦点を当て、実際に体験することで、「ソフト剣道」に活かせる部分はないのか、なぜスポーツチャンバラではいけないのか検討する必要がある。

スポーツチャンバラは、もともとは護身道と呼ばれ、身近な危険から自分の身を守るためのものである、という考えを持っており、武道の要素を取り入れている。また、1973年

「全日本護身道連盟(後の国際スポーツチャンバラ協会)」発足、2000年「日本スポーツチャンバラ協会」設立以来、競技人口の増加とともに競技規定の改訂など現在も発展を続けている。その背景には、剣道に比べ、制約の少なさや安全性の高さなどからスポーツと武道の両面から注目できるという要素がホームページ上でアピールされていた。

そこで、実際に体験してみたところ、剣道の有効打突にはない、足打ちが有効打になることが多く、当たれば良いという概念から撞木足で半身の体勢であることから、そのまま剣道に活かすことはできないと言わざるを得なかった。また、礼を軽視する態度や一本に対する概念、残心がないことから武道の要素が感じ取ることができなかった。しかし、用具の安全性に関しては剣道よりも優れており、検討すべき内容があると思われる。

Ⅳ. 今後の課題

「ソフト剣道」における先行研究がないため、他の武道やスポーツのものから、いかに剣道的に展開できる要素を探していくかが重要であると思われる。また、スポーツチャンバラの面と剣はもともと操作性や安全性を考慮して作られているため、用具の開発にあたって参考にしなければならない。そして、いかに剣道らしくかつスポーツの要素を含めたものを「ソフト剣道」として体系化させ剣道へと繋げるものとして確立させるかが最も重要な課題であると言える。